

子どもを真ん中に保育を考える Ⅲ

～ぐちゃぐちゃと過ごす中で思うこと、4歳児と保健室～

企画・司会・話題提供 杉浦真紀子（お茶の水女子大学附属幼稚園） 指定討論者 川崎徳子（山口大学）
 話題提供者 谷地理沙・渡辺満美（お茶の水女子大学附属幼稚園）

1 企画趣旨

本園では、3歳から4歳に進級する際に、新入園児が加わり、クラスの人数が20人から30人となる。さらに担任が変わる、保育室が変わるなどの環境の変化の中で、4歳児は自分なりに身の回りのもの、人、ことと出会い、揺れながらも動き始める。本自主シンのきっかけは、今年度、初めて4歳児を担当した保育者が、子どもの揺れる姿を受けとめようと奮闘する中で、「子どもの表してくる姿がぐちゃぐちゃで、自分も保育もぐちゃぐちゃ…」と語ったことに端を発している。その語りに耳を傾け、ぐちゃぐちゃと過ごしてきた時間を共に振り返ってみると、何だか笑えるようなことだったり、とても愛おしく感じることもあったりする。そこで改めて、ぐちゃぐちゃと過ごすことの意味や、そこにある大切なことについて考えてみたい。また本園には、4歳保育室の向かいに保健室がある。ケガや病気の手当をするだけでなく、子どもが自ら選んで過ごす場ともなっている。そこで子どもたちと過ごす養護教諭の立場から見える、4歳の子どもの様子や保育者の姿、そして、子どもの生活と共にある保健室のありようについても考えていきたい。（杉浦真紀子）

2 話題提供

「ぐちゃぐちゃの始まり」

今年入園してきたA児。2学期のある日、牛乳パックを長くつないで電車を作った。嬉しそうに持ち帰り、翌日「忘れたからまた作る」と言いに来た。「今日、作ったのは幼稚園用にしようか？」と伝えると「持って帰る」と言う。電車を通して友達とつながり始め、遊びが日々続いていくように感じていたので、置いていけるといいなという思いがあった。するとA児が「先生こわい」と言い始めた。この日、保育が終わった後で、A児のことを考えていた。入園した頃のA児は、身体や表情から緊張が伝わってきて、丁寧に関わりを重ねてきた人だった。だんだんに好きなことを見つけ、気の合う友達を見つけて過ごすようになった姿に安心していたが、この日の様子を見て、まだまだA児が緊張感の中にいることを感じ、丁寧に思いを受けとめていかなければと思った。

この日以降、A児が「めんどくさい」「先生こわい」と度々叫ぶようになった。「お弁当にしよう」「帰りは絵本を読むよ」など、私がやろうとすることは嫌だと言う。こちらから向き合おうとすると、A児はいっぱいいっぱいの表情になり、身体がこわばる感じが伝わってきて、私もどこまで踏み込んでいいのかと迷う。そんなA児の周りで、同じような言葉を口にしたり、荒々しく振る舞

ってみたりする人が出てきて、反対に「Aくん怖い」と言って保育室へ戻れなくなる人も出てきて、A児だけでなく、周りの人たちも一緒になって揺れていく様子が伝わってきた。

そんなクラスの揺れを感じながら、とにかくA児のやりたい遊びを支えよう、という思いで関わった。自動販売機やクレーンゲームなど、作りたいものが次々に出てくる。横に並んで同じものに向かい、一緒にやり方を考えながら手を動かしていると、A児の身体から力が抜けて、ほっとしている様子を感じられた。同時に、「もっと材料が欲しい」「手伝って」と私を呼び、作り込んでいく様子からは、とにかく手を動かしたい、そうすることでなんとかその場にいられるような気持ちも感じた。そんなA児に手を添えながら、私との関係だけでなく、幼稚園という場所もA児にとって安心できるものになっていくといいなという気持ちを込めていた。

周りからの声かけになかなか素直にはなれず、「えー」「やだ」という言葉が口をついて出てくるA児。けれど、そう言いながらも「で、どうしたらいいの」と返してくるようになり、そんなA児の変化を、私も周りの人たちも少しずつ感じていた。仲の良い友達から「Aくんちょっとわがまま」と言われてはったり、自分のやりたいことに隣のクラスの人たちまで一緒になって動いてくれることに喜んだり、周りに友達がいることでA児がいろいろな気持ちを味わっている様子を感じられた。

2学期の終わり頃になり、相変わらず時折怒りながらも、身体をべったりと預けてくるようになったA児から、緊張がほぐれてきたことを感じている。自分のやりたいことによく身体が動き、嬉しそうに笑うようになった。A児にとってようやく幼稚園が自分の居場所だと感じられるようになってきたように思う。こちらから気持ちをかけていても、なかなかA児の様子が変わっていかないことに焦っていたが、こうやって少しずつA児の中の気持ちが変わっていくのかなと感じている。

（谷地理沙）

「保健室につながる電車」

4歳年中組で、たくさんの人が作り楽しんでいる牛乳パックの電車。4歳になったことが嬉しくて張り切って作る人、作ることや担任と関わることで安心したい人等、子どもの心持ちは様々である。次々と「私も作りたい」「2つ作りたい」「もっと長くしたい」とやってくる。保育室の片側を車庫にして電車を並べて置くと、だ

んだんぐちゃぐちゃになっていき、他の人が思わず踏んでしまったり、車庫に置ききれないからと、廊下に置きっぱなしになったりして、トラブルの原因になることもしばしばだった。

ある日、B児の電車が長すぎて、とうとう保育室に収まらなくなった。それでも尚、「もっとつなげたい」と言ってくる。私が「お部屋からはみ出ちゃったよ」と声をかけると、B児は「大丈夫だよ!」と言って、電車を、保育室から廊下、そして保健室へとまたがるように置いて見せた。その様子を見て、「これ以上長くなったらどうしよう」とか、「牛乳パック、使いすぎてるなあ」とかいふ、私のぐちゃぐちゃと考え迷っていたことが、一度に吹き飛んでいった。子どもたちが、保健室さえも居場所にし、保健室とつながりながら安心して過ごしているのだと感じ、嬉しくなった。そして、あの長い電車は、4歳のB児そのものを表しているように感じ、もっと大切に扱っていきたいと思った。（杉浦真紀子）

「4歳児と保健室」

4歳児の向かいにある保健室には、本もたくさん置いてあり、図書室も兼ねている。4歳児にとって自分たちの部屋の一部として保健室がある。しかし、最初から保健室が自分たちの部屋の一部になるのではなく、子どもたちの気持ちとともに自分たちの部屋の一部となって、その子の保健室になっていく。



図 園舎内平面図

新学期、保健室では担任や環境が変わったことに戸惑う子どもたちと過ごすことが多い。子どもたちは、保育室と保健室を行き来する、本を読んで過ごす、保健室で養護教諭と一緒に過ごす等、自分たちで安心する過ごし方を見つけていく。保健室に行けば、先生がいる。いつもいる養護教諭の存在を頼りに過ごしている人を感じる。子どもたちの気持ちを、引き受けながら、担任やクラスとつないでいくように過ごしている。1学期のA児は、保健室の本をこっそりと自分の保育室へ何度も運ぶ姿が見られた。持っていく姿からは、声をかけないでほしいと言っているような動きや視線が送られていたのを覚えている。

園で安心して過ごせる子どもたちが多くなると、子ども同士の関わりが広がっていく。そんな中、保健室では、自分の気持ちをうまく伝えられないもどかしさにイライラしたり、友達と一緒にいられないことで不安になったりする気持ちを、身体で表現しながら過ごすような場所にもな

る。保健室で過ごしていると、4歳児保育室の声が廊下越しに聞こえて、少し離れた場所であることが、ほどよい距離感となっているのを感じる。必要に応じて、保健室にきた子ども同士をつなぐ、他の学年とのつながりを感じるような空間をつくることもある。いつもの友達でもなく、他学年との関わりだったりするからこそ、ぐちゃぐちゃした気持ちに向き合ったり、その気持ちをそっと手放したりできることもあるように思う。A児の担任が遊びを支えようと関わりはじめた頃、A児が保健室で見せる姿も少し変わってきていた。保健室の本や紙芝居をこっそり持っていくなくなった。「かりていきまーす」と言って、多くの本を持っていく時もある。担任の先生に読んでもらいたいものだけを持っていく時もある。A児のなかで幼稚園の居場所が広がってきているのを感じた。

ぐちゃぐちゃした保育に悩む、4歳児担任の話を聞き、他校種の養護教諭仲間と語り合う中で「保健室には秩序が必要」という話題になったことを思い出した。語られた“秩序”の意味合いは、落ち着いた空間を提供する、一定の決まりのある空間の必要性、誰もが過ごしやすいために、というものであった。幼稚園の保健室と“秩序”という言葉が結びつかなかった。

4歳児のぐちゃぐちゃした時期を一緒に過ごしていて、幼稚園は、他校種の考えるような意味合いの保健室だけではないように感じている。幼児期の子どもたちにとって、秩序ある空間としての保健室以上に、自分の気持ちに向き合えるよう、寄り添ったり、支えたり、背中を押したりしながら、共に過ごし、関わる養護教諭の存在も、保健室の役割として大きいのではないかと感じている。子どもの過ごす場として保障されている保健室、時には保育者が一緒に保健室での時間を過ごせるよう支えていきたい。

（渡辺満美）

3 指定討論

「ぐちゃぐちゃになること」

4歳児と過ごす保育者、事例からはぐちゃぐちゃと表現すること以外に言葉が見当たらない程の実感が伝わってくる。その時々保育の中での情景や出来事、子どもとのやりとりや子どもの姿を思い起こす中に感じられてくるもの。ここでの共に語り考える時間の中で進む省察では、いろいろなことが「ぐちゃぐちゃ」となってしまう4歳児のその時期の様相や、この時期だからこそ外せないと思われる保育実践の中での大切なことが表れてくると考えている。同時に、保育を語り合うことの意味も含めて。

子どもたちとそれを取り巻く諸々の環境、それぞれの保育室から続いていく保健室の役割と4歳児の遊びの世界や育ちとのつながり…。4歳児の環境とのかかわり方とそれぞれの子どもの世界の広がりから表れてくる様々な葛藤、そして、その子どもたちと向き合う中での保育者の迷いや育ちへの見通しと、保育の中での決断（選択や判断、かわりや対応等の援助の在り方）等々。それぞれの保育者が心に留めていることを4歳児の姿に映しながら、丁寧に保育者の思いを掘り下げていくことを楽しみに一緒に語っていききたい。

（川崎徳子）